若者には夢を　お年寄りには愛を　私たち・地域でつくるまちづくり

・・・『かもしれない』の可能性。

●2010年「現在」◆自分やまわりの人々から見える若者の現状

農業に携わる県立大学に通う長男。
進路が決まらない高校3年の長女。
今日も会社で時間に追われている自分。我が家はテンテコマイの母子家庭である。

（長男）　就職なく大学へ進学。
入学時、進路指導として先生から出た言葉。
「去年の就職内定者は 5 名のみでした。非常に厳しいと思ってください。」

（長女）　高校三年生。進路のことが常にのしかかる。
先生から出た言葉。
「お母さんを助けて就職するのはよいことだけど、今は〇〇ちゃん・・・就職のが現状なんよ・・・とりあえず専門学校にでもいくね？」

（私）　まちづくり？そんなことを考えるなんて余裕、ない。

――――――――――――「全く元気のない 3 人」――――――――――――

ちょっと、待った!!

何か・・・この会話、この考え・・・おかしくない??

彼らは若者。
これから何かしようという時に「進路」（進む道）がないなんて。
選択ができないなんて。
先生ですらそれを示せない、可能性や夢を開拓する気持ちを持っていない。
今は農業の担い手不足と言われている、農業の良さも見直されてきている。
なのに「就職がない」なんて。
貴重な人材を育てると書いたあの大学案内は嘘だったのか・・・??

中継地点や受け皿の工夫があれば、違った可能性はないのだろうか。

人ごとではないのだ、自分たちが少し動けば少し変わること『かもしれない』。
・・・そうか、まち（地域）づくりの形態も変わらなければならない時なのだ。
今は絵空ごとでまちづくりを考えている場合ではないのかもしれない。

不況のこの時代。

派遣切りで職のない人、
高齢化社会の中での介護のあり方、
若者の就職問題、
仕事のストレスから心の病にかかる人、問題を解決するのは誰だろう。

誰でもない、「私たち」なの『かもしれない』。
若者には夢を、お年寄りには愛を。私たちができること、少し考えてみよう!!

●地域と一緒に問題を解決する力をもとう

コミュニティとは「地域」あるいは「まち」の意味であり、語感からは「町内」というイメージがもっとも近い。
コミュニティケアがもっとも人間的であると古くから重視されてきた。

◆住み慣れた地域・まちで暮らすこと
　地域にはそれぞれ固有の価値観・考え方・文化などがあって長く暮らしているとそれらが自然に身について「その人らしさ」をつくっていくのだと思う。
　高齢者の家族にとって介護という問題はさけて通れないものである。
住み慣れた地域で暮らすことは、その人らしく生きること。それは全ての人の望みでもあるし、それを支えていく地域ケア（コミュニティケア）が重視されつつある。
　地域には、専門的なケア・サービス機関と共に「住民」がいる。私たちだ。
高度で専門的なサービスが必要である反面、見守り・ゴミ出し、専門機関への連絡など住民のちょっとした手助けが大きな価値を持っているように思う。
　住民によるサービス（インフォーマルサービス）がお年寄りや障害を持った人がまちで住み続ける上でどれだけ大事なことか、私がもつまちづくりの考えにはこの地域ケア、人と人とのつながりなしには、人は成り立っていかないという考えがある。
　お年寄りや障害をもつ人の生活上の問題に　気づき（発見）、　住民の手で解決したり、
それが困難な場合は専門的サービスにゆだねながら　住民同士の持つ「共感」や「お互いさま意識」を目覚めさせ、孤独な弱い立場の人を作らない。
QOL（Quality　of　life　＝生活の質）の高い生活、個人として自分の生活に張りやいきがい・潤いがある生活、それこそ、が「生活力の持続性」につながり、「生活の広がり」を
見せるのではなかろうか。
　お年寄りや障害のある人だけに言えることではない、これは若者にも言えることではないだろうか。地域の人の助け、これは孤独を感じている学生や不登校児にどれだけの力や可能性をもっているだろう。
　近隣の地域住民とのチームワークを組むことができる、そんな仕組みを行政に作っていただきたい。そのチームワークこそが若者の進路のヒントを示し、孤独なお年寄りを減らすことになるのだと思う。
　そして、「受容」と「傾聴」このことをいつも頭においておこう。それが人と人のつながりであるから。人と人とのつながりのある地域、まち、に私は住みたい。

◆コミュニティケアのあるまちづくり
　働きたくても、子供を預ける場所がない。介護をしなければならないからと
　自分の生活の質（QOL）が下がっている人はまわりにいないだろうか?
　　★子育て支援の一環としてまちの空き店舗（空室）は学童にできないだろうか。
　　★残存機能を活かし、寝たきりにさせない介護をするためにもおじいちゃん・
　　おばあちゃんたちの力を保育や子育てにいかせないだろうか。
　　花を植えることでもいい、軽い農作業でもいい、子供と一緒にできる菜園を作る
　　場所を作ることはできないだろうか。
　　★障害をもつ人たちのリハビリや心のケアに花の力、自然の力・子供の生きる力（姿）
　　は活用できないだろうか。
　　★いっそ、保育所・学校と介護施設を一緒の建物にはできないのだろうか。
　　★若者は介護の職につくとすぐに辞める傾向があるという、では、･･･身体介護ではなく、施設にいて話し相手はできないのだろうか。一緒に草を刈ったり花を育てたり
　　それだけでいいのではないだろうか。
　　人と人とのつながりを大事にすること、人は人なしでは生きていけないこと、そんなところから教えていけば、介護や福祉の仕事もいつかその必要性が若者にもわかるのではないか。

できないことではないと私は思いたい。
若者だけではない、今は外国から介護職員の研修生を受け入れている、この中で働けない日本人。職がないと嘆く前に目をむけるべき課題だと思う。
★私の会社の中には、障害をもった人や働きたいと思う若者を受け入れる体制ができているだろうか。
★私の住む街の道・建物・映画館・鉄道・生活するすべてのものにバリアフリーが行き届いているだろうか。地域にいる人の声を反映した街づくりがされているだろうか。

「ゆめ」ではない、実現してほしい、自分や周りの意識が変わればきって実現できる。
大きなまちの変化･･･今は要らない。
若者に夢を、お年寄りに愛を、そして自分に自信を。

不況の時代だからこそ、人と人とのコミュニケーションを大事にすること。
「未来予想図」は身近な心がけから変わるの『かもしれない』。
私はそうありたい。そう願いたい。皆の幸せと笑顔ために･･･。

2010.9.30